

## 9. 研究

### 9-1. ジャーナル分類分野に基づいた本学全体の傾向

九州大学では、医学、工学、物理学・天文学、生化学・遺伝学・分子生物学、材料科学分野のジャーナルに掲載された論文の割合が高い。  
 また、九州大学のトップ10%補正論文、トップ10%ジャーナル掲載論文、国際共著論文、産学共著論文の割合は、全て日本全体の平均よりも高い値である。

**Kyushu University** ★  
 九州大学

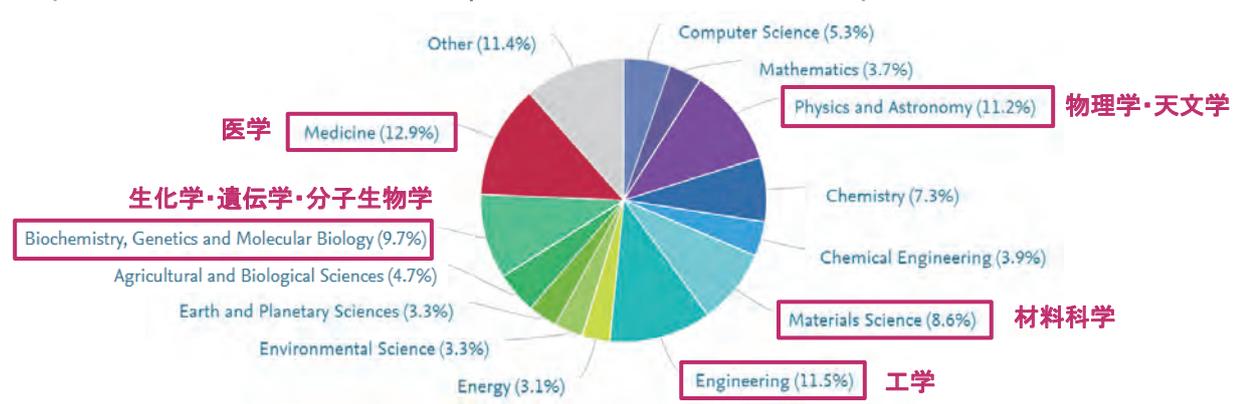
132nd (QS) · 401-500 (THE) · 201-300 (ARWU) | Japan | More details on this Institution

2015 to 2019 | No subject area filter selected | ASJC

※ 円グラフは、2015年から2019年の間に九州大学所属の研究者によって出された論文のScopusジャーナル分野別割合を示す。

#### Overall research performance

<b>25,283</b> ▲ 論文数 Scholarly Output	<b>13,853</b> ▼ 著者数 Authors	<b>1.13</b> FWCI (※1) Field-Weighted Citation Impact
<b>223,832</b> 被引用数 Citation Count	<b>8.9</b> 一論文当たりの被引用数 Citations per Publication	<b>112</b> h5-index



#### Performance indicators

<b>Outputs in Top Citation Percentiles</b> Publications in top 10% most cited worldwide Show as field-weighted <b>トップ10%補正論文</b> Kyushu University: <b>10.5%</b> Japan: <b>8.4%</b>	<b>Publications in Top Journal Percentiles</b> Publications in top 10% journals by CiteScore Percentile <b>トップ10%ジャーナル掲載論文</b> Kyushu University: <b>30.7%</b> Japan: <b>25.2%</b>
<b>International Collaboration</b> Publications co-authored with Institutions in other countries/regions <b>国際共著論文</b> Kyushu University: <b>32.5%</b> Japan: <b>28.2%</b>	<b>Academic-Corporate Collaboration</b> Publications with both academic and corporate affiliations <b>産学共著論文</b> Kyushu University: <b>6.1%</b> Japan: <b>5.4%</b>

(※1) FWCI (Field-weighted Citation Impact)  
 当該文献の被引用数を、同じ出版年・同じ分野・同じ文献タイプの文献の世界平均で割ったもの。  
 FWCIが1以上ということは、平均インパクトが世界平均以上ということ意味する。

出典: Elsevier 社製「SciVal」より (2020年9月現在)

9-1. ジャーナル分類分野に基づいた本学全体の傾向(つづき)

■トピックプロミネンスー論文の引用関係に基づいた大学の強み研究分析ー

SciValのTopic Prominence機能によると、2015年から2019年の間に出版された九州大学の論文のうち、9,213の研究分野が注目度の高いTopicとして出現している。下図はTop1%の注目度に該当する研究分野のTopicを示したものである。物理学・天文学、化学、化学工学、材料科学、工学、エネルギー科学、医学の分野にTopicが集中している。中でも、①トプクオーク ②有機EL(OLED) ③水素脆化 ④ECAP法 ⑤水素吸蔵 ⑥吸熱 ⑦燃料電池 ⑧オートファゴソーム ⑨ミトコンドリア動態 ⑩クリプトクロムに関するTopicは、本学の影響力が強いKey Topic(※1)とされている。これらのTopicは、世界における本学の論文数シェア率、被引用数シェア率が高い傾向にあり、本学の中でも活発な研究分野と言える。

プロミネンス上位1%のトピック (2015-2019)

①

**トプクオーク・パートン・ヒッグス粒子**  
プロミネンス値 99.950  
九州大学の論文数 332、論文数シェア率 13.53%  
九州大学の被引用数 10,344、被引用数シェア率 30.95%

⑩

**クリプトクロム・概日リズム・視交叉上核**  
プロミネンス値 99.644  
九州大学の論文数 29、論文数シェア率 1.38%  
九州大学の被引用数 298、被引用数シェア率 1.09%

⑨

**ミトコンドリア動態・常染色体優性視神経萎縮症**  
プロミネンス値 99.682  
九州大学の論文数 21、論文数シェア率 1.28%  
九州大学の被引用数 854、被引用数シェア率 2.64%

⑧

**オートファゴソーム・マイトファジー・オートファジー関連タンパク質**  
プロミネンス値 99.825  
九州大学の論文数 10、論文数シェア率 0.40%  
九州大学の被引用数 2,872、被引用数シェア率 6.03%

②

**有機EL(OLED)・1H-フェナントロ(9,10-d)イミダゾール・トリス(2-フェニルピリジナト)イリジウム(III)**  
プロミネンス値 99.926  
九州大学の論文数 139、論文数シェア率 4.07%  
九州大学の被引用数 6,322、被引用数シェア率 10.27%

③

**水素脆化・疲労き裂進展・マルテンサイト系ステンレス鋼**  
プロミネンス値 99.048  
九州大学の論文数 168、論文数シェア率 9.99%  
九州大学の被引用数 2,118、被引用数シェア率 17.75%

④

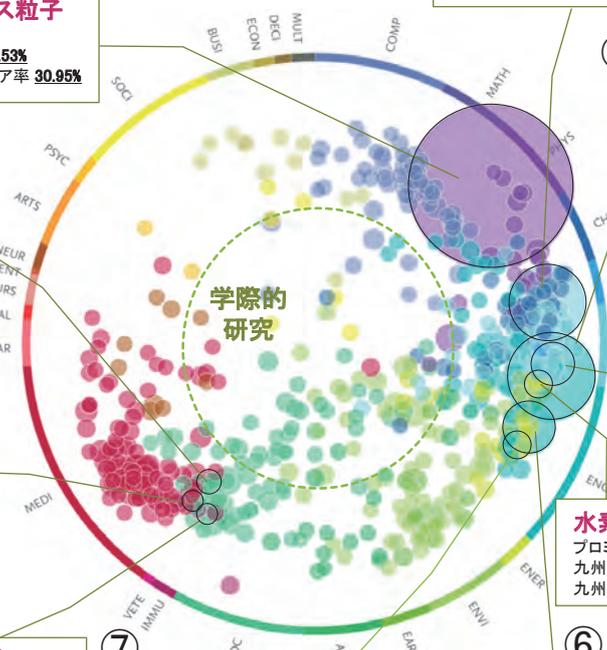
**ECAP法・超塑性・結晶粒微細化**  
プロミネンス値 99.373  
九州大学の論文数 63、論文数シェア率 2.96%  
九州大学の被引用数 1,286、被引用数シェア率 9.24%

⑤

**水素吸蔵・水素化物・脱水素化**  
プロミネンス値 99.096  
九州大学の論文数 24、論文数シェア率 2.12%  
九州大学の被引用数 634、被引用数シェア率 4.82%

⑥

**吸熱・冷凍・冷却システム**  
プロミネンス値 99.210  
九州大学の論文数 82、論文数シェア率 6.37%  
九州大学の被引用数 1,015、被引用数シェア率 7.86%



COMP	コンピュータ化学	ENER	エネルギー科学	MEDI	医学	PSYC	心理学
MATH	数学	ENVI	環境科学	PHAR	薬理学・毒性学・薬学	SOCI	社会科学
PHYS	物理学・天文学	EART	地球科学・惑星学	HEAL	健康衛生学	BUSI	ビジネス・経営学・会計学
CHEM	化学	AGRI	農学及び生物科学	NURS	看護学	ECON	経済学・計量経済学・金融
CENG	化学工学	BIOC	生化学・遺伝学・分子生物学	DENT	歯科学	DECI	意思決定科学
MATE	材料科学	IMMU	免疫学・微生物学	NEUR	神経科学	MULT	学際分野
ENGI	工学	VETE	獣医学	ARTS	人文学		

・ Topic Prominence 機能の概要

Scopusの文献を引用リンクに基づいて約97,000のトピックにクラスタリングし、Prominenceによってランク付けしたものです。新指標Prominenceは、直近の文献の被引用数、表示回数、注目度を示します。Prominenceは、助成金と相関関係があり、研究者と研究管理者が助成金が増える可能性が高いトピックを特定するのを支援します。円の中心にあるトピックほど、学際的なトピックと言えます。(Elsevier社「クイックレファレンスガイド」2018年1月)より抜粋)

(※1)Key Topic

本学の論文数が最多機関の1/3以上もしくは被引用数が最多機関1/3以上あるトピックは、SciValでKey Topicとして定められている。論文数や被引用数シェア率が高く、本学が影響力を持つトピックと言える。

◆見方◆

- ・ 小さい円：各トピック。
- ・ 外側の円周：Scopusで用いられている研究分野(ASJCの27中分類)を色別に表示。
- ・ 小さい円の大きさ：各トピックを構成する論文の数を表す。
- ・ 小さい円の色：トピックを構成する論文の分野のうち、割合が最も大きい分野を円周上の分野の色で示したものです。
- ・ 小さい円の位置：トピックを構成する論文の分野の割合に基づいて配置されている。学際的なものは中心に位置する傾向にある。

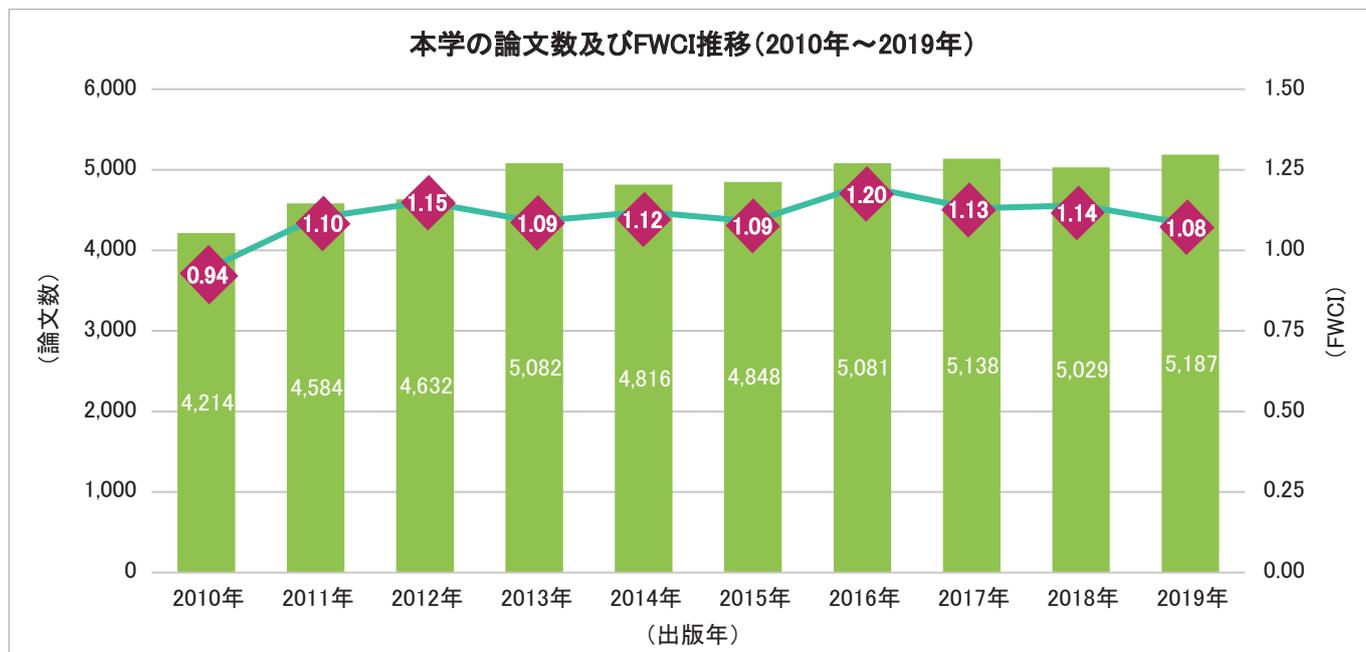
出典：Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較

### ■論文数及びFWCIの推移

本学の論文数は2013年に5,000本を初めて超え、それ以降は5,000本前後を維持し推移している。FWCI(※1)は、2011年に世界平均値の1.0を超え、2016年に1.2という高い値を出したが、2016年以降はFWCIの値は減少傾向にある。

#### ◆九州大学◆



#### ◆他大学との比較◆

【Scholarly Output (論文数)】

順位	大学名	本数
1	東京大	61,058
2	京都大	41,624
3	東北大	31,465
4	大阪大	29,651
5	九州大	25,283
6	名古屋大	24,763
7	北海道大	21,984
8	東京工業大	19,414
9	筑波大	17,255
10	慶應義塾大	16,718

(2015～2019)

【Citation Count (被引用回数)】

順位	大学名	被引用回数	論文あたりの平均被引用数
1	東京大	650,786	10.7
2	京都大	460,852	11.1
3	東北大	280,863	8.9
4	大阪大	272,971	9.2
5	名古屋大	233,680	9.4
6	九州大	223,832	8.9
7	北海道大	183,752	8.4
8	東京工業大	172,350	8.9
9	筑波大	154,584	9.0
10	慶應義塾大	137,158	8.2

(2015～2019)

【FWCI (論文のインパクト)】

順位	大学名	被引用回数
1	京都大	1.36
2	東京大	1.33
3	筑波大	1.19
4	名古屋大	1.18
5	東京工業大	1.14
6	九州大	1.13
6	大阪大	1.13
8	慶應義塾大	1.11
9	早稲田大	1.10
9	東北大	1.10

(2015～2019)

・RU11 (学術研究懇談会)

国立・私立大学の設置形態を超えた11の大学(北海道大、東北大、筑波大、東京大、早稲田大、慶應義塾大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大)による学術の発展を目的としたコンソーシアムである。

(※1) FWCI (Field-weighted Citation Impact)

当該文献の被引用数を、同じ出版年・同じ分野・同じ文献タイプの文献の世界平均で割ったもの。

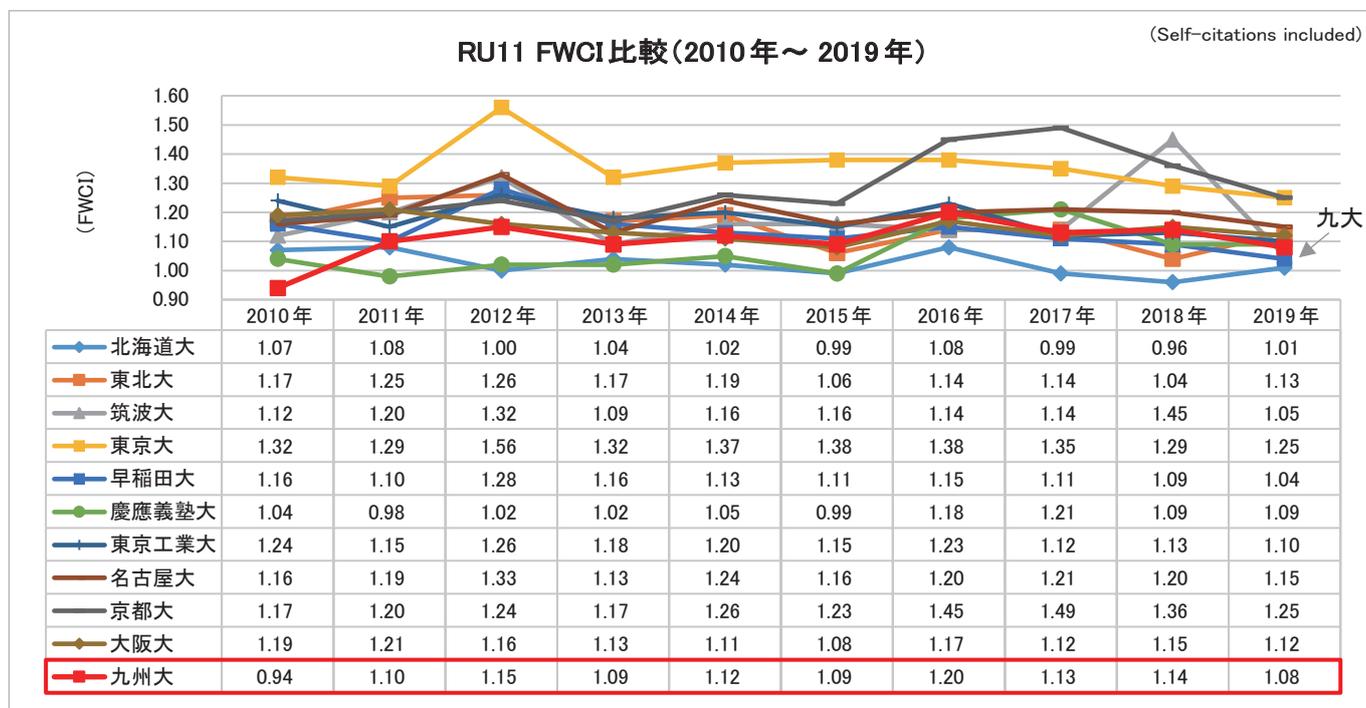
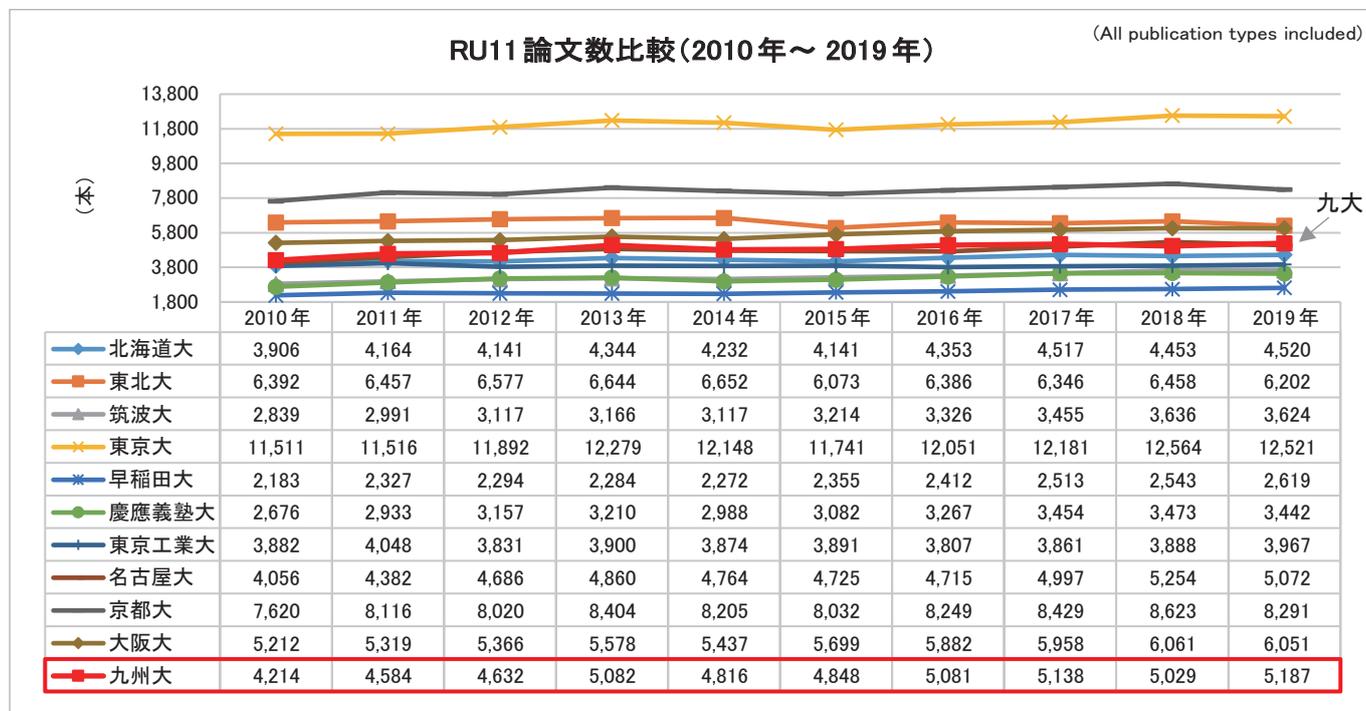
FWCIが1以上ということは、平均インパクトが世界平均以上ということ意味する。

出典: 論文数、被引用数、論文のインパクト Elsevier社「Scival」(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較(つづき)

RU11(※1)の各大学について、直近10年間の論文数の推移を比較した。本学の論文数は10年間で年間4,200本程度から5,000本以上に増加しているものの、RU11内の順位は5位付近で変化していない。FWCI(※2)に関しては、本学は2011年以降世界平均値の1.0より高くなっている。

### ◆RU11での比較◆



(※1)RU11(学術研究懇談会)

国立・私立の設置形態を超えた11の大学(北海道大、東北大、筑波大、東京大、早稲田大、慶應義塾大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大)による学術の発展を目的としたコンソーシアムである。

(※2)FWCI(Field-weighted Citation Impact)

当該文献の被引用数を、同じ出版年・同じ分野・同じ文献タイプの文献の世界平均で割ったもの。FWCIが1以上ということは、平均インパクトが世界平均以上ということを示す。

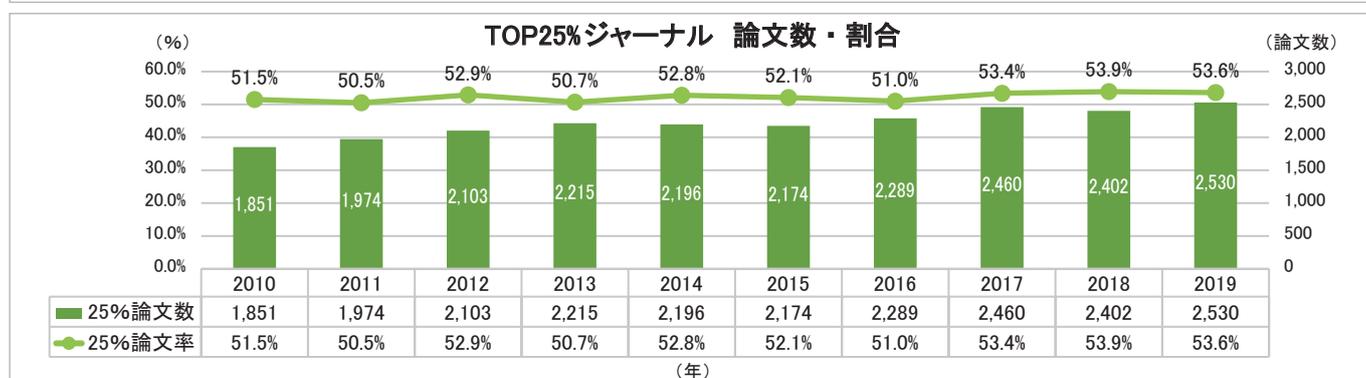
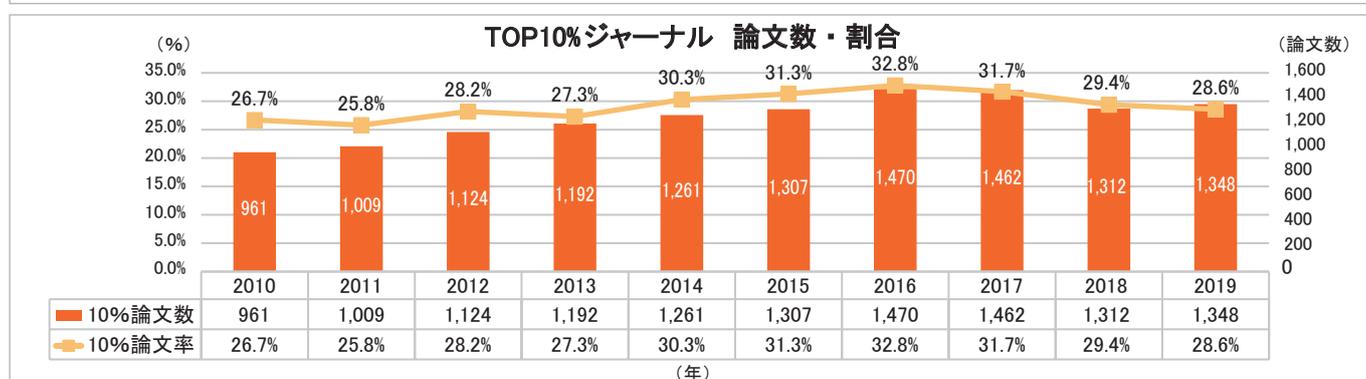
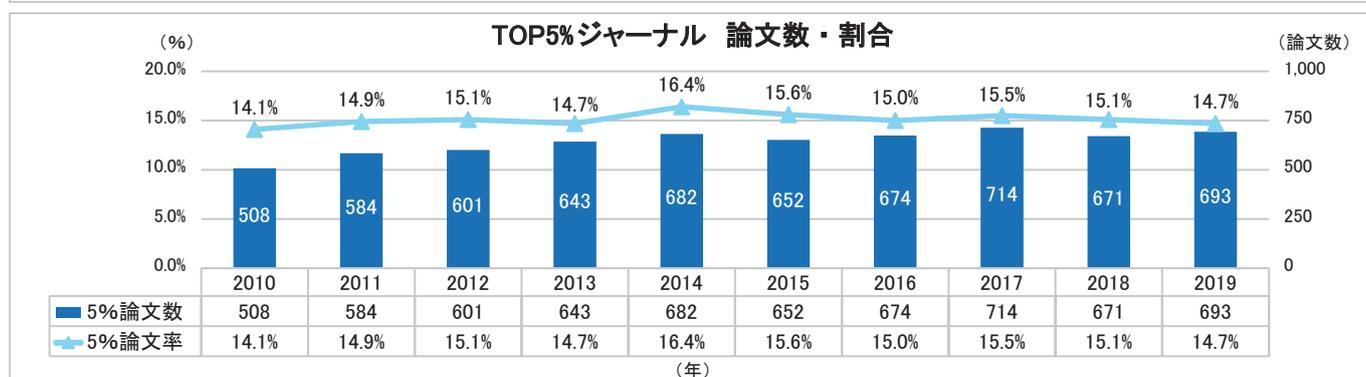
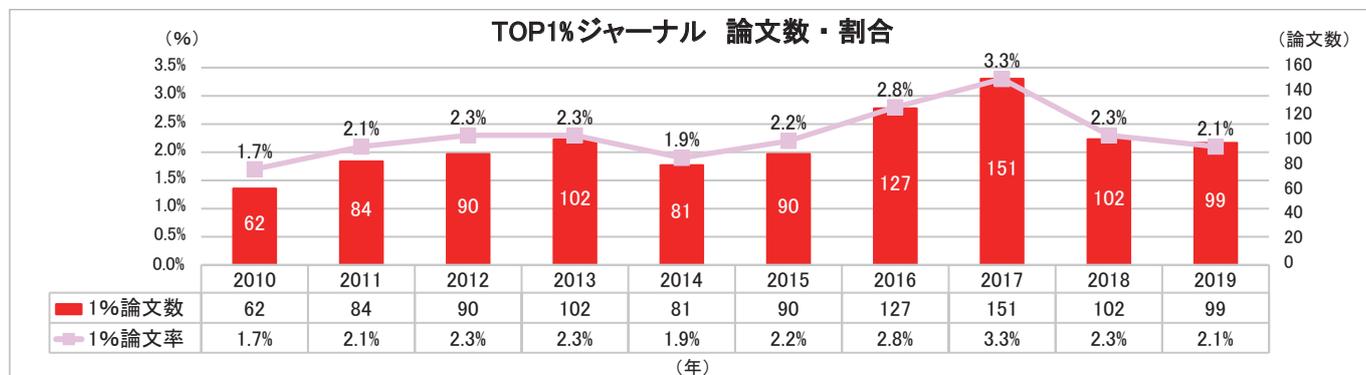
出典: Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較 (つづき)

### ■世界トップのジャーナルに掲載された論文数と割合推移

TOP5・10・25%ジャーナル論文数は長期的に増加傾向にある。TOP25%ジャーナル論文の割合は50%以上を保っており、本学の半数以上の論文が影響力のある雑誌に投稿されている。

#### ◆RU11 での比較◆



・トップ x %ジャーナルに掲載された論文数と割合とは・・・

被引用数ベースで世界トップ%ジャーナルに掲載された論文数と割合。Scopusにおける各年の被引用数を元に、上位1%、5%、10%、25%に含まれるジャーナルに掲載された論文数・割合を示すもの。

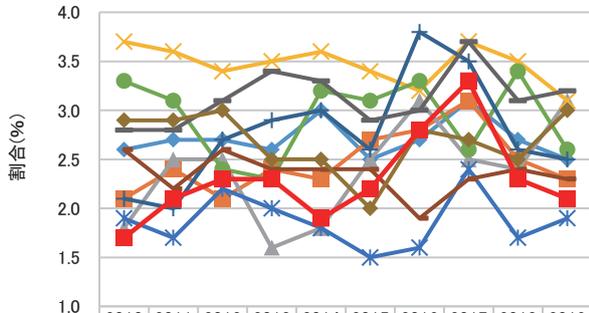
出典：Elsevier 社製「SciVal」より(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較 (つづき)

RU11(※1)の各大学について、TOPジャーナル論文率の推移を比較した。本学は特にTOP10%ジャーナル論文率が、2016年までは増加傾向にあったが、以降減少に転じている。

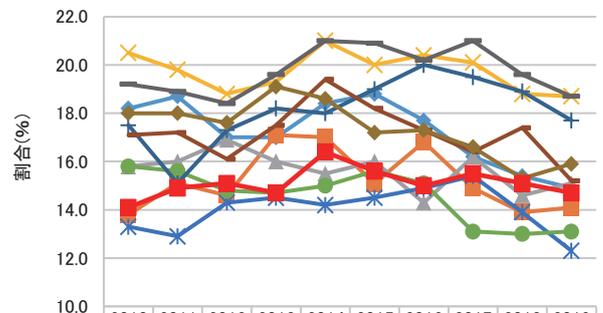
### ◆RU11での比較◆

TOP 1% ジャーナルに含まれる論文の割合



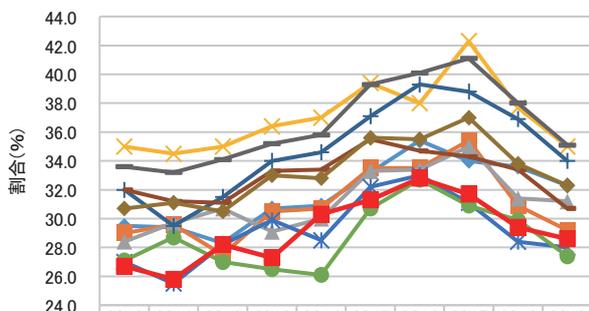
	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
北海道大	2.6	2.7	2.7	2.6	3.0	2.5	2.7	3.1	2.7	2.5
東北大	2.1	2.4	2.1	2.4	2.3	2.7	2.8	3.1	2.5	2.3
筑波大	1.8	2.5	2.5	1.6	1.8	2.5	3.1	2.5	2.4	3.1
東京大	3.7	3.6	3.4	3.5	3.6	3.4	3.2	3.7	3.5	3.1
早稲田大	1.9	1.7	2.2	2.0	1.8	1.5	1.6	2.4	1.7	1.9
慶應義塾大	3.3	3.1	2.4	2.3	3.2	3.1	3.3	2.6	3.4	2.6
東京工業大	2.1	2.0	2.7	2.9	3.0	2.6	3.8	3.5	2.6	2.5
名古屋大	2.6	2.2	2.6	2.4	2.4	2.4	1.9	2.3	2.4	2.3
京都大	2.8	2.8	3.1	3.4	3.3	2.9	3.0	3.7	3.1	3.2
大阪大	2.9	2.9	3.0	2.5	2.5	2.0	2.8	2.7	2.5	3.0
九州大	1.7	2.1	2.3	2.3	1.9	2.2	2.8	3.3	2.3	2.1

TOP 5% ジャーナルに含まれる論文の割合



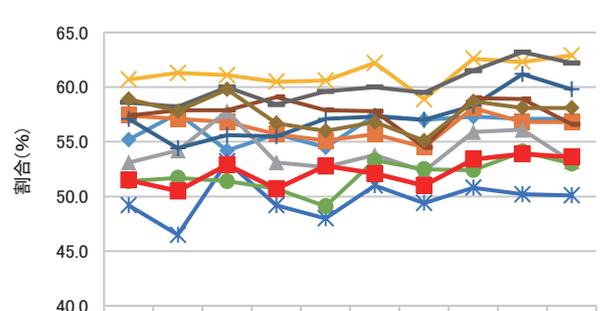
	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
北海道大	18.2	18.7	17.0	17.0	18.4	18.8	17.7	16.2	15.4	14.9
東北大	13.8	15.1	14.6	17.1	17.0	15.1	16.8	14.9	13.9	14.1
筑波大	15.8	16.0	16.9	16.0	15.5	16.0	14.3	16.2	14.6	15.1
東京大	20.5	19.8	18.8	19.3	21.0	20.0	20.4	20.1	18.8	18.7
早稲田大	13.3	12.9	14.3	14.5	14.2	14.5	14.9	15.4	13.9	12.3
慶應義塾大	15.8	15.6	14.8	14.7	15.0	15.6	15.1	13.1	13.0	13.1
東京工業大	17.5	15.1	17.3	18.2	18.0	19.0	20.0	19.5	18.9	17.7
名古屋大	17.1	17.2	16.1	17.5	19.4	18.2	17.3	16.4	17.4	15.2
京都大	19.2	18.9	18.4	19.6	21.0	20.9	20.2	21.0	19.6	18.7
大阪大	18.0	18.0	17.6	19.1	18.6	17.2	17.3	16.6	15.3	15.9
九州大	14.1	14.9	15.1	14.7	16.4	15.6	15.0	15.5	15.1	14.7

TOP 10% ジャーナルに含まれる論文の割合



	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
北海道大	29.5	29.4	28.3	30.7	30.9	33.2	35.4	34.0	33.6	32.3
東北大	29.0	29.6	27.5	30.5	30.7	33.5	33.5	35.4	30.9	29.2
筑波大	28.4	29.7	30.7	29.1	30.0	33.3	33.4	35.0	31.4	31.2
東京大	35.0	34.5	35.0	36.4	37.0	39.4	38.0	42.3	37.7	35.0
早稲田大	27.0	25.5	28.2	29.9	28.5	32.2	33.0	31.1	28.4	28.0
慶應義塾大	27.1	28.7	27.0	26.5	26.1	30.7	32.7	30.9	29.9	27.4
東京工業大	32.0	29.5	31.5	34.0	34.6	37.1	39.3	38.8	36.9	34.0
名古屋大	32.0	31.2	31.1	33.3	33.4	35.5	34.7	34.3	33.4	30.7
京都大	33.6	33.2	34.1	35.2	35.8	39.3	40.1	41.1	38.0	35.1
大阪大	30.7	31.1	30.5	33.0	32.8	35.6	35.5	37.0	33.8	32.3
九州大	26.7	25.8	28.2	27.3	30.3	31.3	32.8	31.7	29.4	28.6

TOP 25% ジャーナルに含まれる論文の割合



	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
北海道大	55.2	57.6	54.2	55.7	54.5	57.4	57.0	57.3	57.1	57.1
東北大	57.4	57.1	56.8	55.7	55.1	55.7	54.5	58.1	56.8	56.8
筑波大	53.1	54.2	57.8	53.1	52.7	53.8	52.3	55.9	56.1	53.2
東京大	60.7	61.3	61.1	60.5	60.6	62.2	58.9	62.6	62.3	62.9
早稲田大	49.2	46.5	53.2	49.2	48.0	51.0	49.4	50.8	50.2	50.1
慶應義塾大	51.4	51.7	51.4	50.7	49.1	53.3	52.5	52.4	54.1	53.0
東京工業大	57.1	54.4	55.6	55.5	57.1	57.3	57.0	58.3	61.2	59.8
名古屋大	57.4	57.9	57.9	59.1	57.9	57.8	54.5	59.0	58.9	56.6
京都大	58.6	58.2	60.0	58.4	59.6	60.0	59.5	61.5	63.2	62.2
大阪大	58.9	57.8	59.8	56.7	56.0	56.8	55.1	58.7	58.1	58.1
九州大	51.5	50.5	52.9	50.7	52.8	52.1	51.0	53.4	53.9	53.6

(※1)RU11(学術研究懇談会)

国立・私立の設置形態を超えた11の大学(北海道大、東北大、筑波大、東京大、早稲田大、慶應義塾大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大)による学術の発展を目的としたコンソーシアムである。

出典: Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較(つづき)

### ■論文の量と質の総合比較

下記散布図は、右上にいくほど、論文の質が高いと言える。論文数は5,000本前後を推移しており、TOP10%補正論文数割合(※1)は10%程度で推移している。また、RU11(※2)で比較するとTOP10%補正論文8位である。ただし、論文数5位、FWCI(※3)値は6位であり、RU11の中で論文の量と質については本学は中央に位置している。

#### ◆九州大学◆(2015年～2019年)

本学のTOP10%補正論文数割合(縦軸)×FWCI(横軸)×全論文数(バブル大きさ)

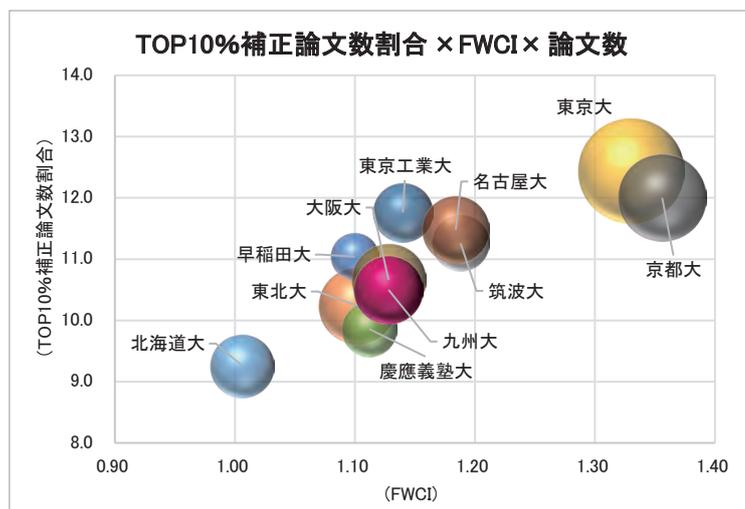
年	TOP10%補正論文数割合	FWCI	論文数
2015	11.2	1.09	4,848
2016	10.6	1.20	5,081
2017	10.0	1.13	5,138
2018	10.5	1.14	5,029
2019	10.2	1.08	5,187
平均	10.5	1.13	5,057



#### ◆RU11での比較◆(2015年～2019年の平均)

TOP10%補正論文数割合(縦軸)×FWCI(横軸)×論文数(バブル大きさ)

大学名	TOP10%補正論文数割合	FWCI	論文数
北海道大	9.3	1.01	4,397
東北大	10.2	1.10	6,293
筑波大	11.3	1.19	3,451
東京大	12.4	1.33	12,212
早稲田大	11.0	1.10	2,488
慶應義塾大	9.9	1.11	3,344
東京工業大	11.8	1.14	3,883
名古屋大	11.5	1.18	4,953
京都大	12.0	1.36	8,325
大阪大	10.7	1.13	5,930
<b>九州大</b>	<b>10.5</b>	<b>1.13</b>	<b>5,057</b>



(※1)TOP10%補正論文数割合

被引用ベースで世界トップに入る論文数(分野補正した値)の割合。Scopusにおける各年の被引用数をもとに上位10%に含まれる論文数の割合を示すもの。

(※2)RU11(学術研究懇談会)

国立・私立の設置形態を超えた11の大学(北海道大、東北大、筑波大、東京大、早稲田大、慶應義塾大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大)による学術の発展を目的としたコンソーシアムである。

(※3)FWCI(Field-weighted Citation Impact)

当該文献の被引用数を、同じ出版年・同じ分野・同じ文献タイプの文献の世界平均で割ったもの。

FWCIが1以上ということは、平均インパクトが世界平均以上ということを意味する。

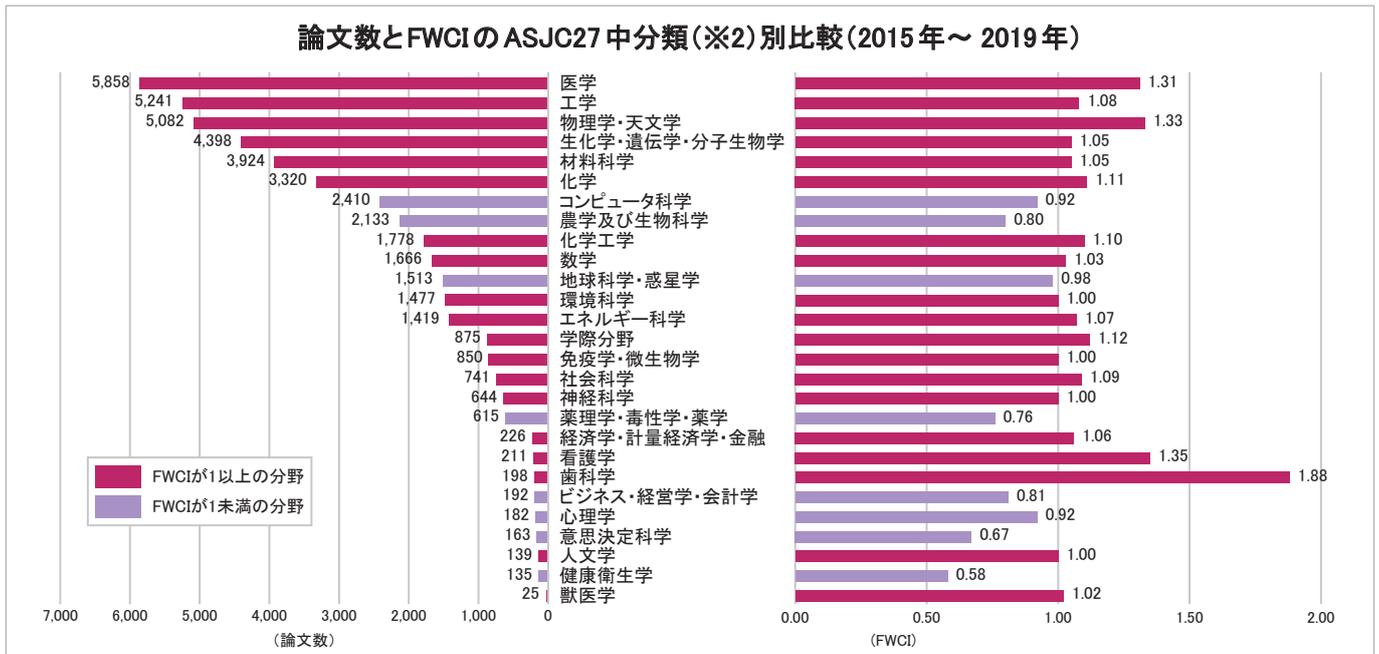
出典: Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較(つづき)

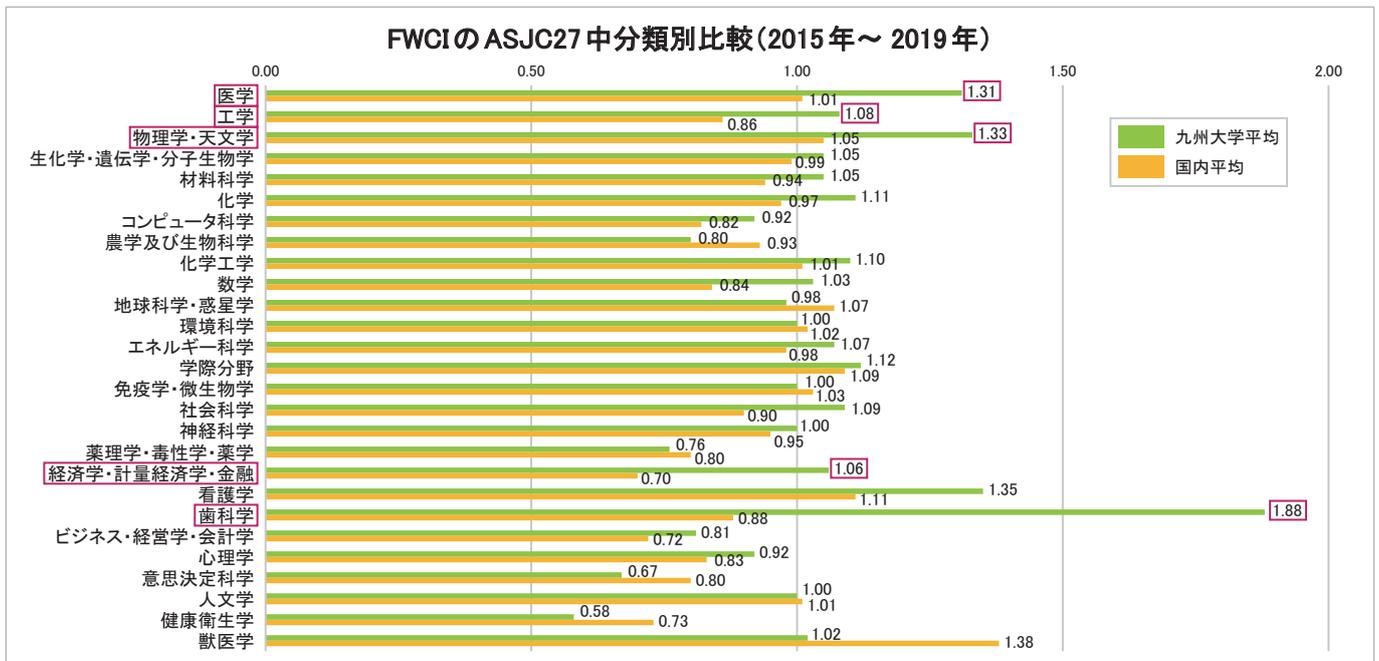
### ■ 本学と国内平均の比較 (ASJC27 中分類別) - FWCI -

FWCI(※1) が世界平均の1以上である分野は、27分野中19分野である。その中でも、国内平均と比較してFWCI値が特に高い上位5分野は、歯科学、経済学・計量経済学・金融、医学、物理学・天文学、工学分野である。論文数が多くFWCIが高いほど研究力に厚みがあること(大学の強み)を表す。また、論文数が少なくFWCIが高い場合は、研究力の高い特定の教員の存在を示す場合が多い。なお、特定の教員が巨大な研究者コミュニティに所属する場合は、論文数・FWCI共に値が高くなる場合が多い。

#### ◆ 九州大学 ◆



#### ◆ 国内平均と九州大学との比較 ◆



(※1)FWCI(Field-weighted Citation Impact)

当該文献の被引用数を、同じ出版年・同じ分野・同じ文献タイプの文献の世界平均で割ったもの。

FWCIが1以上ということは、平均インパクトが世界平均以上ということを意味する。

(※2)ASJC27中分類

Scopusのジャーナル分類(ASJC: All Scopus Science Journal Classification)に基づく27の中分類。

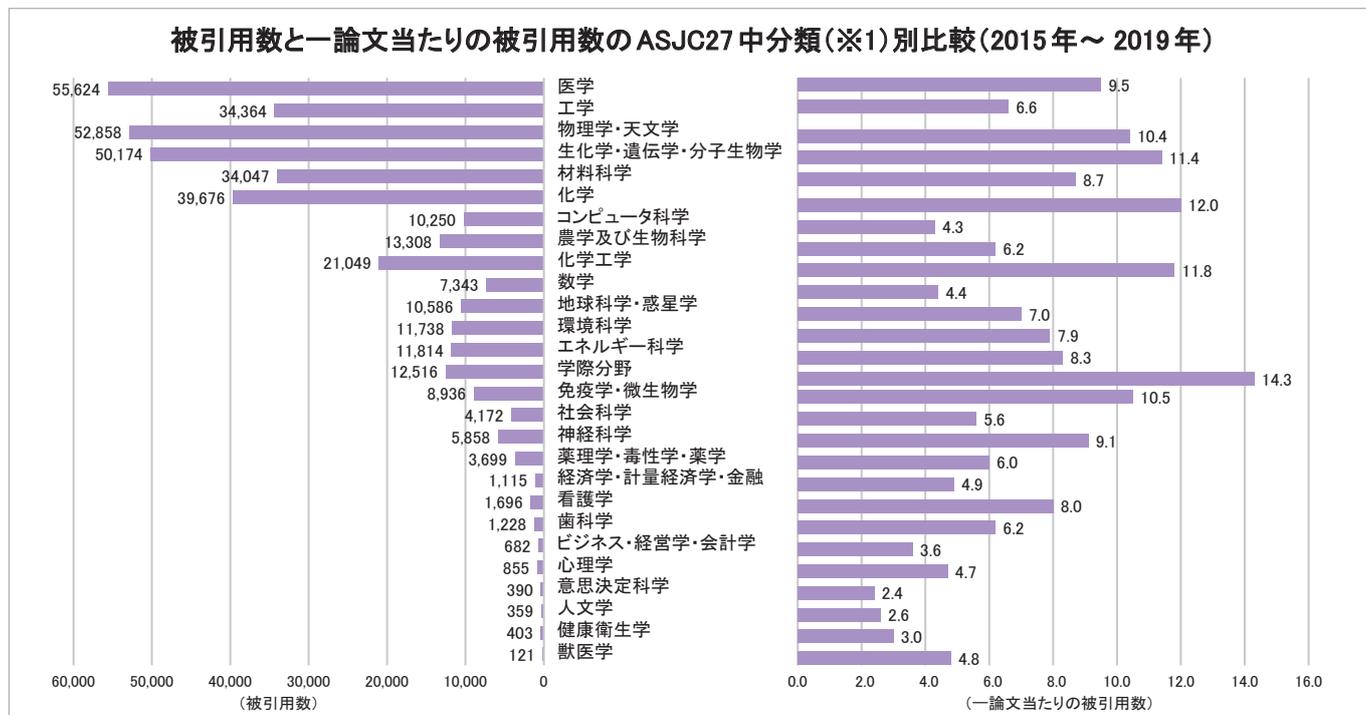
出典: Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較 (つづき)

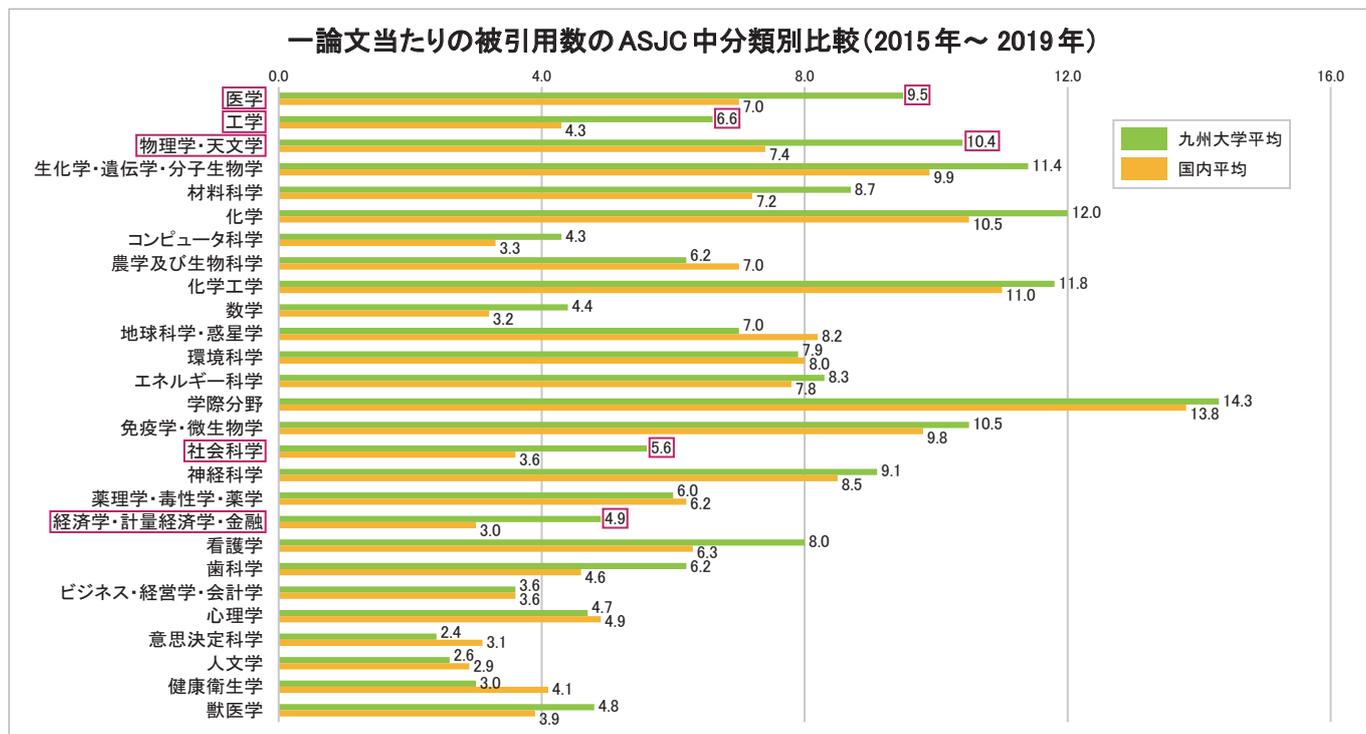
### ■ 本学と国内平均の比較 (ASJC27 中分類別) — 論文当たりの被引用数 —

一論文当たりの被引用数が、国内平均を超えている分野は、27分野中18分野である。その中でも、国内平均と比較して一論文当たりの被引用数が特に高い上位5分野は物理学・天文学、医学、社会科学、工学、経済学・計量経済学・金融分野である。

#### ◆ 九州大学 ◆



#### ◆ 国内平均と九州大学との比較 ◆



(※1) ASJC27 中分類

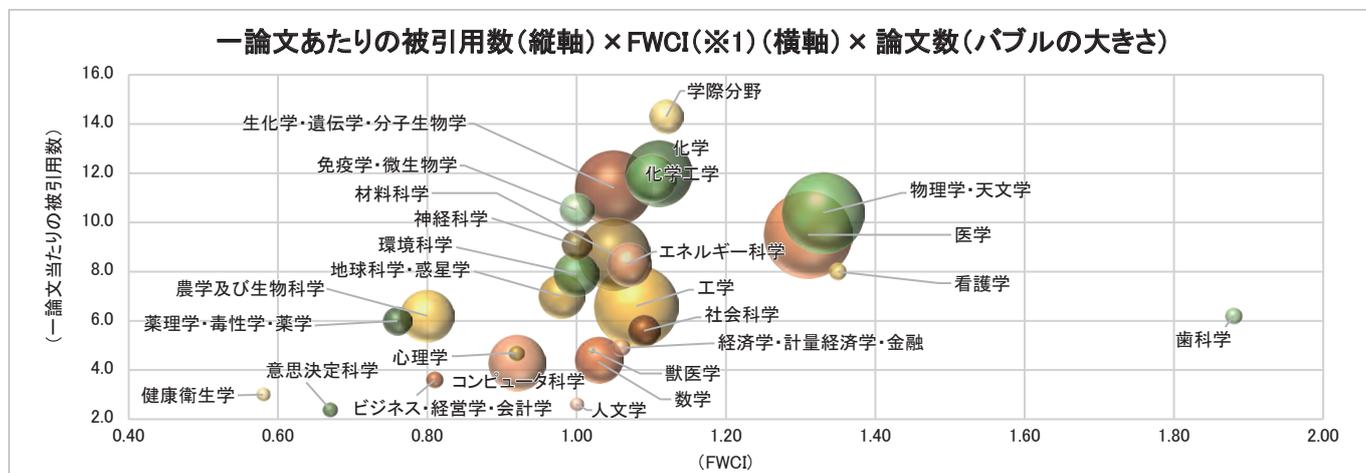
Scopusのジャーナル分類(ASJC: All Scopus Science Journal Classification)に基づく27の中分類。

出典: Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

## 9-2. 論文の量と質についての比較(つづき)

### ■ 本学の論文の研究分野についての比較 (ASJC27 中分類別) (2015年～2019年)

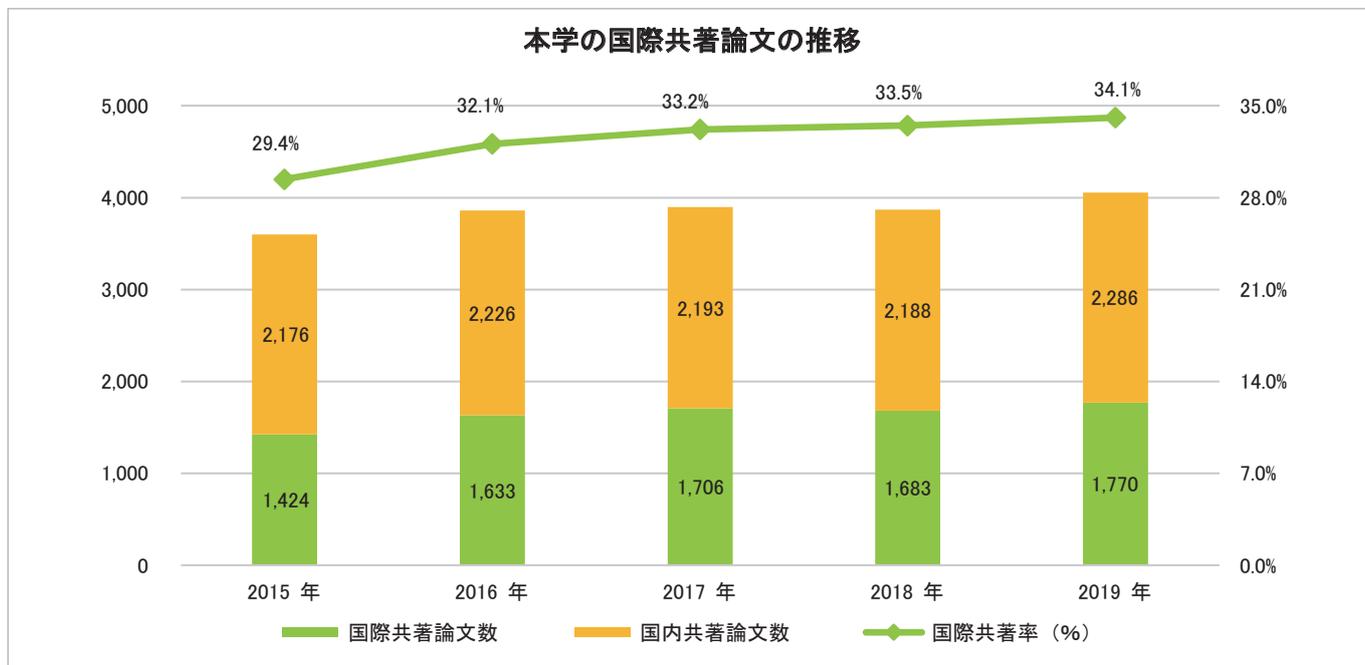
右方にある分野ほどFWCI(※1)が高く、上方にある分野ほど一論文当たりの被引用数が高くなり、論文の質が高いことを示す。特に、歯科学、看護学、物理学・天文学、医学、学際分野の論文の質が高い。(学際分野とは、「Nature」や「Science」のような総合学術雑誌に掲載された論文を示す。)



## 9-3. 国際共著論文

本学でみると、国際共著論文数・国際共著論文比率はともに増加している。国際共著論文数は2010年から2019年で2倍以上に増加しており、さらに国際共著論文比率も2010年と2019年を比較すると21.0%から34.1%へ上昇している。増加率はRU11(※1)の中で最も大きい。

### ◆九州大学◆



### ◆研究院別◆ (2015年～2019年)

順位	研究院	国際共著論文数(合計)(本)	国際共著論文比率(平均)(%)
1	工学研究院	1,311	29.1
2	理学研究院	1,241	55.7
3	農学研究院	728	39.7
4	システム情報科学研究院	696	30.4
5	医学研究院	615	12.8
6	総合理工学研究院	430	37.2
7	薬学研究院	157	24.5
8	歯学研究院	149	20.9
9	比較社会文化研究院	86	43.9
10	芸術工学研究院	76	19.5
11	人間環境学研究院	56	32.4
12	経済学研究院	55	37.4
13	数理学研究院	36	19.4
14	法学研究院	21	53.9
15	言語文化研究院	3	7.5
16	人文科学研究院	0	0.0

(※1) RU11(学術研究懇談会)

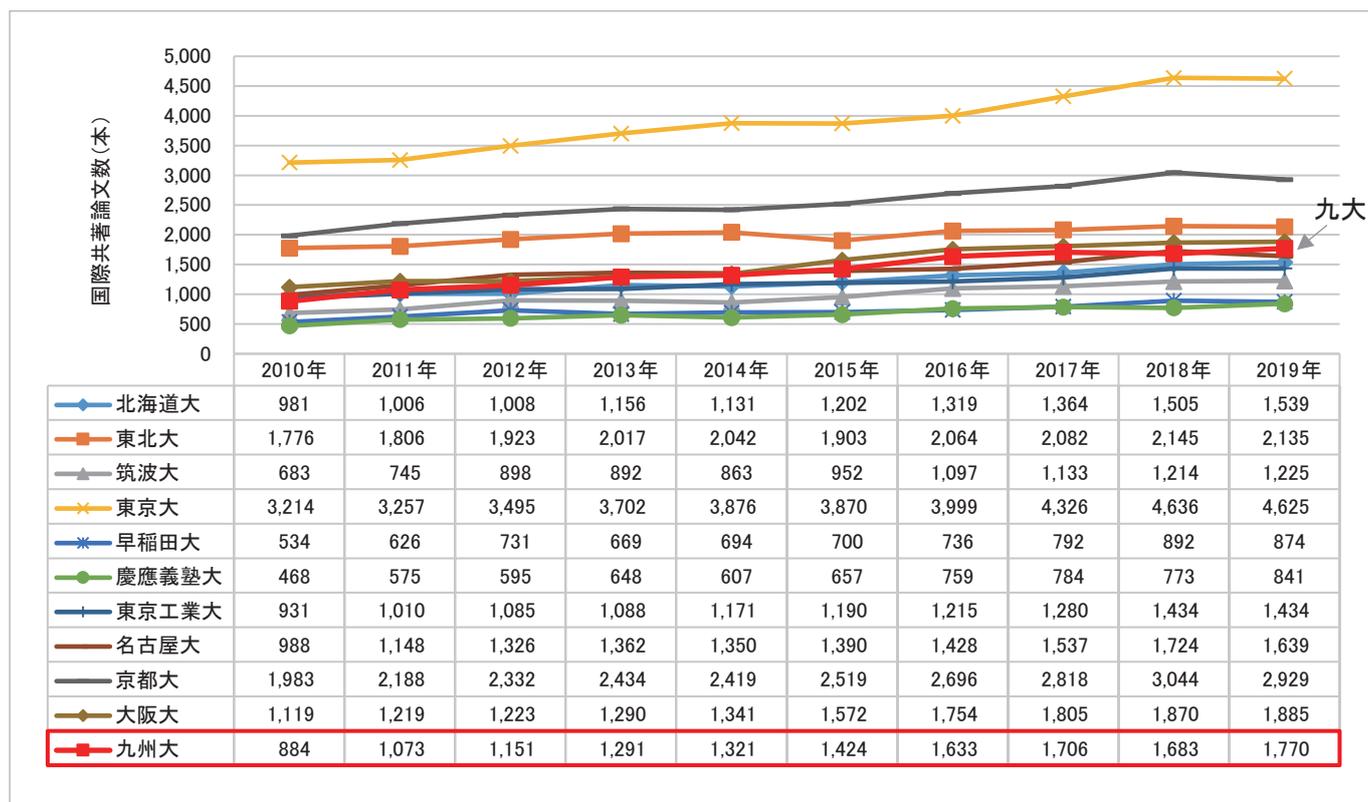
国立・私立の設置形態を超えた11の大学(北海道大、東北大、筑波大、東京大、早稲田大、慶應義塾大、東京工業大、名古屋大、京大、大阪大、九州大)による学術の発展を目的としたコンソーシアムである。

出典: Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

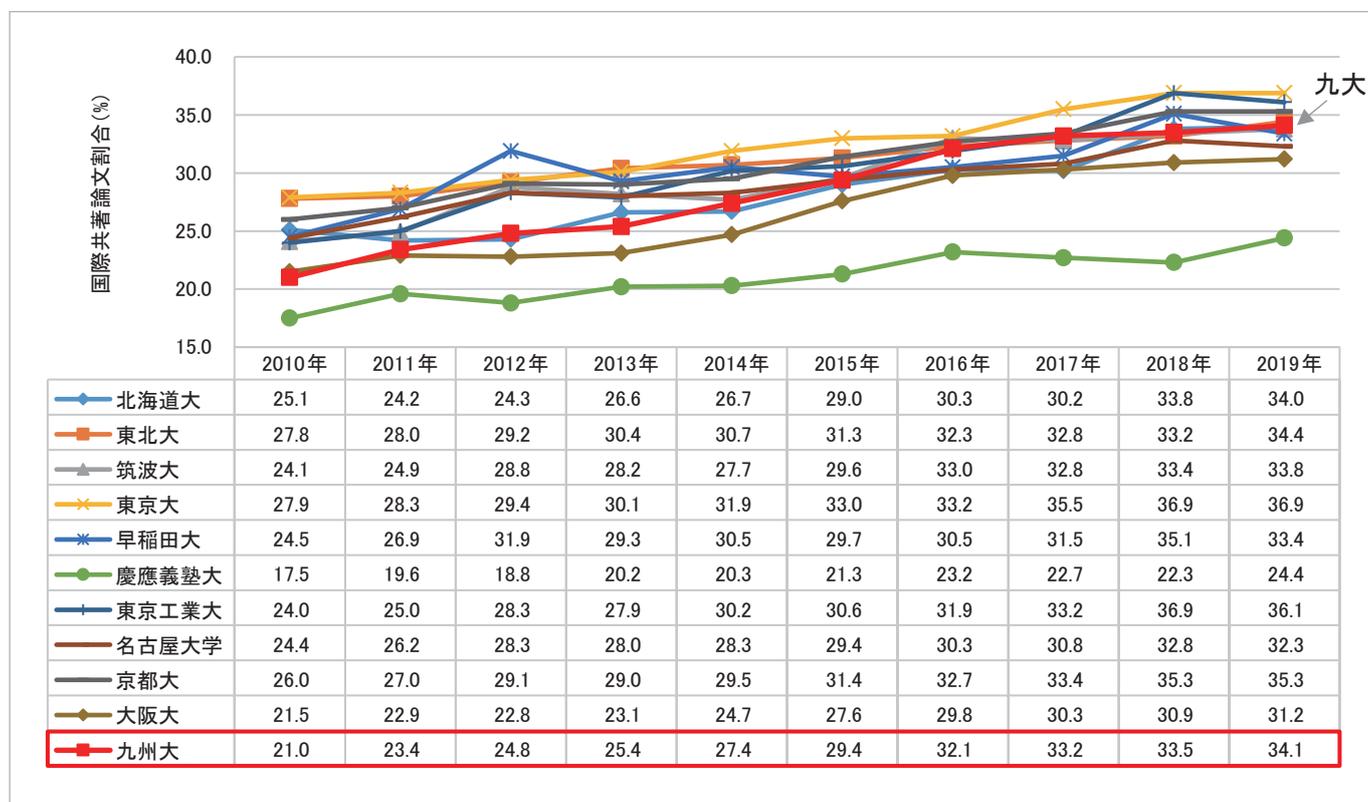
### 9-3. 国際共著論文(つづき)

#### ◆RU11での比較◆ (2010年～2019年)

#### 国際共著論文数



#### 国際共著論文比率



・RU11(学術研究懇談会)

国立・私立の設置形態を超えた11の大学(北海道大、東北大、筑波大、東京大、早稲田大、慶應義塾大、東京工業大、名古屋大、京都市大、大阪大、九州大)による学術の発展を目的としたコンソーシアムである。

出典: Elsevier社製「SciVal」より(2020年9月現在)

